



第98号

鯉淵学園同窓会

# 同窓会報

令和7年5月31日

発行：鯉淵学園同窓会

〒319-0323

茨城県水戸市鯉淵町 5965

TEL：029-259-2811

FAX：029-259-6965

http://koibuchi.main.jp/

メールアドレス：koibuchidousou@gmail.com

## 創立 80 周年記念

同窓会長あいさつ

「建学80周年記念事業  
への寄付金の御願い」



黒澤 賢治  
(25期卒)

学園の80周年の歩みと変遷

8,000名余の卒業生を輩出し、多くの「実践的農業・農村指導者」を育成して来た学園も、幾多の学制改革や学科再編を繰り返しつつ、時代要請に沿った「学園運営と教育理念の実現」に奔走して来ました。

茨城県東茨城郡内原町に広大なキャンパスと実習農場を有し、戦後の農村社会・コミュニティの復興再生・営農集団の新たな創生をリーダーとして支える人材の養成拠点として、多機能にわたる成果と顕著な類例を日本農業に与えつつ、独自の崇高な「実学・実践主義」を貫いた唯一の学舎であったと言えます。全寮制完全自治生活の教育は学生達の「自主性・人間修養」の原点となっており、今に生かされていると確信しています。80年、多くの事があつたが、2年制・3年制・4年制の専門学校として、同窓生の温かい支援と御理解を頂く中で学園は存続し、新たな時代を目指し歩みを継続しています。

創立80周年記念事業実施に伴う寄付金の御願いと変わらぬ支援を

昨年は1月1日発災の能登半島地震に始まり、多くの同窓生の皆様より被災地在住の同窓生の日も早い復興支援のために、貴重な「復興支援金」を御寄せ頂き、被災地の皆様に感動を与えつつ、意義ある支援の形を被災地に贈る事が叶い、同窓会の役割と機能を全うする事が出来感謝申し上げる次第であります。

また、今回は「鯉淵学園創立80周年記念事業」実施に伴う寄付金の御要請を同窓生の皆様方に御願ひさせて頂く事となり、恐縮している次第であります。また、「80年の鯉淵学園のメモリアル」と「リスタート」の起点となる節目に致したく、財団法人鯉淵学園・学園サイド・同窓会が相計り、将来共に、喜びが共有できる「価値ある記念事業」を目指し、企画に取り組んでまいりました。不安定な社会情勢、景気浮揚がままならない実態、同窓生の高齢化等、極めて厳しい環境下での「寄付金」集めが予測されますが、特段なる御理解と御協力を重ねて御願ひ申し上げます。

「高度な教育環境の基本をなす体制整備」を記念事業に

かつての「記念事業」は、図書館建設・同窓会会館建設・農産物直売所「農の詩」建設等、後年度経費が累増するハードな諸施設が中心でしたが、教育実践体制の拠り所となるIT・AI・WiFi等の機能整備を中心に、国庫補助金を頂きつつ授業・研究・他機

関との連携改善にその力点を集約し、将来を見据えた体制整備を記念事業としたいと考えております。既に小・中・高の教育においてはタブレット端末の活用が普遍化しており、コロナ禍の「リモート授業」にも対応が困難であった学園内の体制を順次、整備していきたいと考えております。

従って、「基本教育体制整備事業」のベース事業費は、4,000万余が必要となり「同窓会記念事業寄付金」の目標を2,000万円とし8,000名余の同窓生・関係機関等に御要請致したいと考えますので御理解・御協力を重ねて御願ひ申し上げる次第であります。

11月21日「創立80周年記念式典」を予定

式典開催にあたり、「記念フォーラム」を併せ開催し、農業・農村・食品産業界等のトップランナーを御迎えし、日常、大変御世話になっている茨城県をはじめ関係機関そして同窓会の皆様方を交え「鯉淵学園からの発信」をさせていただきたいと企画しております。コロナ禍を経て県別同窓会も再開されて来ておりますが、直近では期別同窓会が全国各地で企画されつつあります。あらゆる機会を通じ「鯉淵学園80周年記念事業」に対する御理解と支援の輪が全国に拡大します事を念じてやみません。青雲の志と大きな夢を抱いて鯉淵の里に集い、2〜4年間の寝食を共にした「鯉淵学園」も80周年を迎えます。大いなる節目を刻みたいものです。

# 学園創立80周年を迎えて



理事長  
森 啓一

## はじめに

鯉淵学園同窓生の皆様、いつもご支援いただき、心より感謝申し上げます。  
今年度、我が鯉淵学園は創立80周年という偉大な節目を迎えることになりました。この特別な年を迎えるにあたり、過去から現在にわたり学園を支え続けてくださった学生、教職員、同窓生、そして地域の皆様に心より感謝申し上げます。

## これまでの姿

80年前、鯉淵学園は、農業教育を通じて、地域社会の発展のみならず、日本を支える使命を胸に設立されました。学園発足当初、初代学園長であられた小出先生は、学生募集の中で、「教育の本質は個人の完成にあり、確固たる信念により動き、自己の責任を果たし、よく社会を担う人物とならねばならない」さらに教育という観点から、農業を通じて、「国家再建に命がけで取り組む人物を期待する」と記されていました。

それ以来、多くの卒業生が今日まで農と食の分野で活躍し、持続可能な社会の実現に向け、大きく貢献してきました。鯉淵学園は、ただ教育を提供する場ではなく、農と食の未来を創造する場所としての役割を、今日も果たし続けています。

## 現在の姿

農と食は、我が国の成長の基盤となるものであり、必要不可欠なものであります。しかしながら、現在、食の安全性・食糧問題は日々深刻となっております。

農業所得の大幅な減少、後継者不足の深刻化、食料供給に対する不安、そして農村活力の低下等が問題視されています。人が生きていく上で、最も大切な農と食の問題を蔑ろにして、社会の健全な発展はあり得ないと考えます。

今日、農業、食品分野においても、革新的な技術や知識が必要とされる時代を迎えています。私たちはこれまでの伝統と精神を守りつつ、未来を見据えた教育を提供して行かなければなりません。

学生たちが新たな可能性を探求し、そして挑戦し、地域社会と連携しながら、農業の発展に寄与する力を養うべく、さらに努力を重ねていく所存です。

## これからの姿

80周年を迎えるにあたり、私たちは過去を振り返るとともに、将来に希望を見出す機会としたいと思います。農業の持続可能な発展を目指し、教育の質を高め、社会への貢献を続けることで、次の世代へ、より良い未来を受け渡すことを目指します。

これからも、多くの方々と力を合わせ、農業教育の可能性をさらに広げていけることを楽しみにしています。

## 最後に

鯉淵学園は、「真生鯉淵」をスローガンとしています。真生とは、新しく生まれるの新生ではなく、真に生まれるという意味での真生です。

そのために最も重要なのが教育であり、これまで鯉淵学園が大切にしてきた

価値観教育、人格教育、実践教育を通じて、日本の農と食に大いに貢献できる人材に育ってほしいと思います。そうした中で、鯉淵学園の同窓生の皆様のお力は、これからの鯉淵学園にとり、なくてはならない大きな力であると確信しています。

今後とも、引き続き皆様の暖かいご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

## 学園創立80周年を迎えて



学園長  
長谷川 量平

鯉淵学園の創立80周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。

本学園は、創立以来、教育を通じて食と農の世界に数多くの有能な人材を輩出し、社会に貢献してまいりました。この長い歴史の中で、卒業生の皆様がそれぞれの分野で活躍し、学園の名を高めてこられたことは、私たちにとって大きな誇りであり、励みとなっております。この記念すべき節目を迎えることができたのも、同窓生の皆様の温かい支援と学園への深い愛情の賜物であり、心より感謝申し上げます。

80年という年月の中で、社会は大きく変化し、食と農の在り方や、教育の在り方も変化してまいりました。特に食の川上に位置する農業の重要さへの再認識が

現在なされていると思います。

本学園もまた、時代の変化に適応しながら、実学を重視した教育を提供し続けております。これまでの伝統を守りつつも、未来を見据えた新たな取り組みを行い、より質の高い教育環境を整備することで、次世代を担う学生たちの成長を支えています。

同窓生の皆様にとって、鯉淵学園での学びや仲間との思い出は、かけがえない宝物であると思います。この学園で培われた知識や経験、そして人とのつながりが、皆様の現在の活躍の礎となっていることを大変嬉しく思います。また、同窓生同士の絆は、学園の発展にとっても非常に重要なものです。今後ともこうしたつながりを大切に、同窓会活動を通じて新たな交流の場を築いていくことを願っております。

本学園がこれからも発展を続け、さらなる飛躍を遂げるためには、卒業生の皆様のご支援とご協力が不可欠です。同窓会がより一層活性化し、世代を超えた交流が生まれることで、学園と社会全体の発展にもつながることでしょう。これからも母校を支え、後輩たちの成長を温かく見守っていただければ幸いです。

80周年の記念事業として、本学園内の





DX（デジタルトランスフォーメーション）化を行いたいと思います。学園内は建物間通信施設がありますが、設置後20年が過ぎ、老朽化だけでなく、通信能力を大きなものに変え、学園内の教育力を大きく向上させたいと思います。学園内すべての施設で通信網を整備するには2千万円近くかかりますが、皆様方からのご寄付による浄財と、農業教育施設整備補助金をうまく組み合わせて、最大限の効果を得たいと思います。後輩のため

## 学園80年の思い出 「鯉淵学園と我が人生」



名誉教授・  
農学博士（東京大学）  
西村 典夫（4期卒）

はじめに

最初に鯉淵の土を踏んだのは昭和21年の早春、全国農業会・高等農事講習所入所試験の時であった。受験生3,000余名から200名近くの合格だから、さぞ素晴らしい学校であろうと期待して入所したが、だんだん様子が分かって来ると、おんぼろ校舎に杉皮葺きのバラック学生寮、辞めようかと思わないでも無かったが、郷里の会津を出るときに沢山の餞別を貰って来たし、何より優秀な友がずらり。明確な目標を持っていたわけでは無いが、午前中講義、午後農場実習。春秋それぞれ2〜3週間の農繁終日実習なるものがあつた。授業はさほど負担に感じ

にもご協力よろしく願います。

最後になりますが、本学園の80周年を迎えるにあたり、改めて卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。皆様のご健康とさらなるご活躍をお祈りするとともに、これからは母校・鯉淵学園が「真生鯉淵」のスローガンの元、より輝かしい未来へと歩んでいけるよう、日本の食と農が正しく発展していくように共に力を合わせてまいりましょう。

なかつたから、専ら友と談笑し、お粗末ながら数千冊の古本を備えた図書室の本を片っ端から読みあさって楽しかった。第2次世界大戦敗北の翌年だから食料不足、衣類も無く、住まいも雨風を凌げれば上々と言うべきだったか。学費は授業料・学生寮費無し、食費も募集要項では只であつたが、入学時1ヶ月30円の負担（今なら数千円といったところか）であつた。そんな状態で小遣いの多くは時々水戸、たまには東京神田に行つて古本を買つた。

恩師

専任、外来と多くの先生にご指導を頂いたが、中でも小出満二先生（所長・農業教育）、藤岡孟彦先生（植物病理）、上村高直先生（哲学・倫理）、鞍田純先生（教頭・農政）、石橋幸雄先生（農業経営）、近 秀次先生（憲法）には特別にお世話になった。それぞれの専門のみならず、諸先生の人生そのものに接する機会に恵まれた。劣悪な食糧難の時代に再三ご馳走になったり、お風呂上がりのお話も遠い遠い昔話になったが、大変ご迷惑であつたろうなと恐縮しつつ、今もって鮮明に想い浮かんで懐かしい。

就職

昭和24年3月、卒業と同時に生物（後で作物保護に改称）研究室の助手になったが、せいぜい2〜3年の短期と考えていた。前後して農業改良普及員、国家公務員（現在の1種）に合格していたから、国や県から幾つかの勧誘があつたが気が進まなかつた。昭和32年、藤岡先生が65歳で定年退職された後を、常勤講師として引き継ぎ、昭和38年には助教授、45年に教授。38年、山形県から専門技術員の話があつたが辞退。翌39年、農水省北陸農業試験場の植物病理研究室長の要請も断つたから、その後はしばらく転職の話は途絶え、平成6年、定年の前後に或る大学の校長就任を求められたがそれも固辞。結局、我が生涯は鯉淵に始まり鯉淵に終わることになった。それというのも大した理由が在った訳ではなく、生来の小心と常に難題を抱える母校鯉淵学園を後にする気になれなかつただけのことである。かといって、特別母校の役にたつた訳でもないが、友部の住宅を長年空き屋にして、平成6年3月65歳の定年まで、学園舎内に住み続けた。全寮制度を標榜する鯉淵学園教育の基本理念に添え続けたという、ささやかな安堵感があつた。

不安定な学園の財政基盤

敗戦間もなく、連合軍司令部は、全国農業会の解体を命じ、昭和22年に高等農事講習所教育を継承する、財団法人農民教育協会を立ち上げ、翌23年には農民教育協会高等農事講習所になり、全国農業会は解散となった。途端に教育財政は極度に逼迫して職員も運営費も大幅な削減をせざるを得なかつた。学生の負担増も伴つて、昭和21年4月

200名近くの入学生は、24年3月の卒業時は120名に減少した。日本における学校教育上の格付けは各種学校であつたから、講習所卒業生に社会的に通ずる卒業資格はなかつた。しかし実力はあつたと思つている。例えばその年に行われた第1回・農業改良普及員資格試験では、全員が合格、それもずらりと最高点であつたから、外部の関係者は驚いたらしい。私自身、講習所の理念と実践に幾つかの不合理と思うこともあつたが、後戻りも出来ず、4期生の1人として巣立つた。第1回の入学で第4回卒業生と言うのは、敗戦によつて廃止された満蒙開拓指導員養成所の皆さんが1〜3年生として編入され、それぞれ1〜3期生として卒業されたからで、それも理由の1つとして4期生は昭和21年7〜8月に教育改革のストライキをやつた。私は1〜3期の方々に責任があるとは考えられなかつたので、参加しなかつた。勿論退学を決めていたが、一件沈静し、退学すべきは我々なんだからとみんなに慰留されると、つい決心も鈍つて、今振り返ると最も長く鯉淵に居てしまうことになった。私は文部省管轄だとか、農林省管轄だとか縄張り争いをやつていないで、しっかりと所定の教育課程を済ませた者は、どしどし社会貢献の機会を提供すべきだと思つている。24年、25年の頃は、高等農事講習所鯉淵学園、26年に鯉淵学園と改称したように思う。戦後の学制改革で7期生から2年制、農協科廃止を伴つて27期生から3年制。その後4年制、そして私が退職して程なく、鯉淵学園農業栄養専門学校4年制となり、その後また2年制に変わり、まさに鯉淵学園はめまぐるしい程に翻弄に翻弄を繰り返して現在がある。

## 学園教育の向かうべき方向

喉もと過ぎれば熱さを忘れるの諺にも似て、深い反省からスタートした国造りも情けない程に変容してしまつた。飽くなき利便性を追求するあまり、国土は荒廃の一途を辿りつつある。謙虚な心構えで歴史に学び、とかく忌み嫌われる農村社会に飛び込んで、その経済的、社会的、文化的地位の向上を目指して汗を流そうとする不屈の人材を育成する必要は昔も今も変わらない。鯉淵学園の社会的役割が終了したかのような論調もあるが、そうではなくて、創立の目標を実現できる、教育環境を整え、その実を上げていかなければならない。支援の体制は、農水省、農業団体は勿論、広く国民的な大きな輪を形成する努力が欠かせない。それは農民教育協会とか、鯉淵学園発展の為に、かような純なものではなく、日本国民みんなのために必要だからである。日本農業は金ばかりかかるから、外国から安い食料を買えば良いとまともに考えている国民も少なくないように思う。しかし幾ら金を積んでも国民の食料(取り分け食糧)が手に入らない時が来ない保証は全くない。私はこの辺の自覚を全国民が理解すべきで、特に国政に携わる方々に肝に銘じて欲しいと訴えたい。

## むすび

直接学園の教育に関わらなくなつて30年になろうとしているが、専門科目に比重を置きすぎると、目先は役立ちそうだが、私の経験では、専門教育は短命に終わり易いと思う。急テンポの現代社会、学生時代に習つたことの多くは程なく時代遅れで役に立たなくなつてしまう。やはり自分で考え、難題を恐れずに挑み、解決前進してゆく実力を養うべきであらう。それには卒業のしつぱなしではなく、

鯉淵学園農村社会研究会「友の会」のように有志相携えて、生涯交流を深めながら、互いに助けあい、励まし合う組織が望まれる。現在、それを支援する筈の鯉淵学園も、また同窓会も極めて弱体と言わざるをえないが、どうか、めげずに活動を続けて欲しい。末筆ながら会員の皆さんのますますのご健勝を鯉淵の地から祈つて止まない。

※鯉淵学園農村社会研究会  
友の会 会報「あゆみ」より転載。



昭和20年頃 正門付近からの眺望 南寮6棟と大講堂など

## 学園創立80周年を迎えて



客員教授  
入江 三弥子  
(29期卒)

高度経済成長期が終わる頃の昭和47年に学園へ入学いたしました。オイルショック、沖縄の返還、学生運動の終焉等ありましたが、学園にはその頃の若者の純粋さとエネルギーが充満していました。

女子(紫苑)寮では、4畳半の小さな部屋に2人、小さな練炭炬燵を間に布団を敷いて眠るなど、驚きの連続でした。寮長などを経験し、人の前で話をする、自分の考えを伝える等、人生の初めてを沢山経験しました。楽しかったですね。寮費はみんなで使う共通費だけで、住居費や電気・水道料金など支払った覚えがありません。机やストローブ・洗濯機・冷蔵庫・テレビなども用意してありました。学園は私たちの生活を丸抱えで支えてくれていました。同級生たちも、教育費の安さを進学先に選んだ理由の一つと言っておりました。これに共感される卒業生の方は多いのではないのでしょうか。

学制は3年制で、栄養士資格を取れました。入学の目的は普及員の資格をとる事でしたから、農業や農村生活・栄養学等幅広く勉強しました。栄養士資格は卒業すればもらえるぐらいにしか思っていなかったですね。でもその後は栄養士でご飯を食べてきたわけで、人生判らないものです。

卒業後学園に入職し、助手を拝命しま

した。社会人のイロハは白田喜代志先生に教えていただき、なんと仕事始めは先生と一緒に女子寮の風呂のタイル修理でした。「寮生活と学生食堂がなくなつたら学園は変わる」と常々聞いておりました。だからこそ、寮や食堂の運営に取り組んだのです。また、当時白田先生は日本栄養士会茨城県支部の会長でした。研究室が事務局を兼ねており、白田先生のお供で勉強させていただきました。その頃から県や病院・学校の栄養士さんとの付き合いがありましたから、そのお陰で人脈ができました。

先頃、栄養士の話がテレビで放送されました。栄養士の仕事の一端が皆さんに知られて良かった。学園の栄養士養成は昭和45年に開始し、55年になります。卒業生は約1,250人になるようです。  
(\*鯉淵学園における栄養士養成課程設置50年の軌跡・浅津竜子)

いつの間にか栄養士養成に携えることになり、3年制から4年制課程になり、管理栄養士への道が開けた時には、とても喜びました。このころの卒業生は、色々な研究活動をやることができました。しかし、突然軌道に乗っていた4年制度から2年制度に縮小することになってしまいました。時間が無い状況でしたので待つたなしで計画し、申請しました。そして2年制度の栄養士養成は茨城県内の高校生に好評でした。こんなに学生募集がうまくいったのは初めてでした。

昭和から平成の卒業生は「寮生活が楽しかった」、平成の後半から令和の学生は「寮生活よりも栄養士の勉強が楽しかった」と言ってくれます。学園の理想を信じて、人が成長していくお手伝いができた喜びでしょうか。善意の人の中で仕事できたことに感謝しています。



## 創立80周年を迎える

### 学園の近況



農業技術センター長  
秋葉 勝矢  
(46期卒)

**はじめに**  
日頃より本校教育事業へのご理解、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。

4月2日に入学式も終え、本科生・研修生合わせて40名の学生を迎えることができました。創立80周年という節目の年に入学した新入生は、日々同級生や先輩達と仲良くなり、少しずつ学園生活に慣れていっている様子がうかがえます。

#### 理念を基に

令和5年度より新体制となつてから今年度で3年目を迎えます。代々受け継がれてきた教育理念「1. ヒューマニティーを基調とした、広い視野と科学的な考え方と実践力を育成する。2. 多数の人々と協力して農と食改善・発展に寄与できる指導力を育成する。」は基より、森理事長の打ち出したスローガン「真生鯉淵責任・団結・信頼」を御旗に学生と教職員一丸となりあらゆる分野で邁進しております。

#### 同窓生の視点に立つと

私が学園に入学、そして卒業したのは

かれこれ30年以上も前になりますが、全寮制時代を過ごしました。当時は本科3年、普及専攻科1年の計4年間を鯉淵で学び、卒業後2年間は農業関連企業で勤務しましたが、平成7年に縁あって本校に職員採用されました。それから数十年間、農と食を学ぶ学生達とともに過ごして参りました。

こうして長らく学園に勤務しておりますと、いつの時代もそうであると思いますが、私達の学園生時代を含めて世の中の流れや変化とともに、学生達の物事の捉え方や考え方、行動なども時代とともに変化していくのが肌で感じ取ることができます。

様々な面において比較的恵まれ、不自由が少ない現代の若者達と云われますが、鯉淵学園に集まる学生は時代が変わつてもやはり基本である「農と食」という「原点」を学ぶことは変わっていない。そのような目標を持つ学生達の育成と人間形成に微力ながら寄与していければ幸いです。

#### 学生募集にご協力ください

18歳人口減少問題や社会情勢などにより、近年の鯉淵学園における学生募集には苦慮しておりますが、教職員一同学園の持つ特色や魅力を高校訪問以外でもPRしております。また、最近では学生が自ら得意分野であるSNS等を駆使し、学園や学生生活を情報発信してくれています。多方面でご活躍されている同窓生のみならずにおかれましても、次の90周年、100周年、さらにその先へと是非学生数増加にご協力いただきますようお願い申し上げます。

## 創立80周年を迎える

### 学園の近況



食品栄養科副科長  
浅津 竜子  
(47期卒)

本校は、今年で80周年を迎えました。私自身は卒業30年です。入学のきっかけは、兄が在籍していたこと（農業科45期）です。そして両親からのアドバイスにより生活栄養科（栄養士養成課程）を選択しました。在学時は、学生食堂のアルバイトを通じ大量調理や食事提供に馴染み、先生方からは管理栄養士の資格取得を勧められ、また、夫（農業科47期）との出会いもありと様々な関わりにより、生活栄養科の助手として平成5年4月に入職しました。それ以来、紆余曲折ありながらも皆様方に支えられ現在を迎えています。

職員としては学生食堂での食事提供から始まり、学生の健康管理、生活指導や学生自治会対応に関わってきました。全寮制から希望寮生への変換期には、学生自治会の会則改正や学生食堂の給食制度の変更など、学生たちとともに改善活動に取り組んできました。学生寮や学生食堂の運営は利用者からの収入が頼りであることから、寮生数・学生数の減少はかなりの痛手で悩みが尽きませんでした。

教育面では「給食の運営」に関わる講義や実習を担当し、その他にキャリア教育チームリーダーとして就職指導にも取り組んでいます。4年制から2年制課程

への変更、カリキュラム改正、学生の調理技術向上のための取り組み、コロナ禍での試行錯誤の状況、就職指導の成果などは鯉淵研報に寄稿しておりますので合わせてご確認くださいと思います。

栄養士養成は今年で55年目を迎えます。現在の食品栄養科（2年制課程・定員40名）は平成23年度以降14年間で65・78期生・計428名の栄養士を輩出しています（年平均31名）。茨城県内には栄養士養成校が3校、管理栄養士養成校が4校と、他県と比較しても多く、少子化が進む中でどの養成校も学生募集に熱心に取り組んでいる様子が見受けられます。そのような中でも令和7年度の入学生を25名迎えられたことは、本校が茨城県の県央部にあり比較的人口が多いことや通学しやすい立地であるとともに、本校の栄養士養成教育の成果として同窓生の働きぶりが認められ、様々なところで好評価をいただいているからこそと考えています。

これからも栄養士養成を続けていくために必要なことは、栄養士を志す学生および保護者の皆様方に選択いただける魅力的な学校作りが肝要と考えています。私たちもしっかりと取り組んでいきますので、同窓生の皆様方にも学生募集や募金活動にご協力を賜りたくご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

\*鯉淵学園教育研究報告は、  
<https://www.koibuchi.ac.jp/report/>を参照ください。

\*「調理実習室」は築50年、「集団給食実習室（旧学生食堂）」は築45年です。これからも栄養士養成教育を続けていくためにも皆様方からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



教育研究報告  
編集委員長  
野口貴彦

教育研究報告編集委員長の野口と申します。日頃から同窓生の皆様には本校の教育についてご理解とご支援を賜り感謝申し上げます。

鯉淵学園教育研究報告（鯉淵研報）第35号（総説1報、報文1報、事例報告2報、解説3報、随想1報の計8報を掲載）を令和7年3月に無事発行することができました。論文は、総説として藤井義晴先生（アグリビジネス科、東京農工大学名誉教授）の「ムクナ豆（ハッシュウマメ）の起源・栽培方法・機能性と今後の利用の展望」が、報文として井上洋一先生（アグリビジネス科）の「集落営農組織の現状とその役割」が、事例報告として浅津竜子先生（食品栄養科）の「食品栄養科における就職指導について」と勝山由美先生ら（食品栄養科）の「教育・研究チームによる学習サポートの取り組みとその成果」が、解説として泉田光先生（食品栄養科）の「トマトに含まれるリコピンの生理作用について」、高崎瑞穂先生ら（食品栄養科）の「新型コロナウイルス感染症流行下における食中毒発生状況の変化」と望月真友先生（食品栄養科）の「古代米とは？その栄養価と今後の可能性」が、随想として筆者（食

品栄養科）の「『鯉淵学報』創刊そして『鯉淵研報』へ」が掲載されました。第35号の論文掲載数は、第30号（休刊後の再発行）以来最大の8報となっており、本校教職員の教育・研究に対する高い意識が表れていると言えます。また論文の内容も、農業、農村、栄養、食品衛生、学生指導の成果まで幅広く、多くの皆様に興味を持ってお読みいただける内容となっています。ここでは、各論文の詳細については割愛させていただきますが、本校公式ホームページに鯉淵研報（デジタル版）を公開していますので、そちらをお読みいただけると幸いです。

現在は、第36号編集委員会が立ち上がり年度末の発行（令和8年3月）に向け準備に入ったところです。編集委員長は、筆者（分子生物学）が留任（3期目）となり、編集委員も高田良三先生（家畜栄養生理）、前嶋智先生（作物保護）、浅津竜子先生（給食管理）、幹事も勝山由美先生（栄養指導）がそれぞれ留任となりました。また、この鯉淵研報には、鯉淵学園同窓会が編集委員会（初代編集委員長 平山嘉夫氏・張替誠一郎氏）を立上げ創刊されたという経緯があります。第36号編集委員会としても同窓生の皆様から論文の投稿をお待ちしていますので、興味のある方は編集委員長までご連絡いただければ幸いです。我々編集委員会は、鯉淵研報の発行継続と更なる誌面の充実に向けてまいりますので、引き続きご協力をお願いいたします。

## 鯉淵学園教育の近況と学生募集協力へのお願い



入試支援担当  
前嶋 智

日頃より本校事業にご理解・ご協力を賜り誠にありがとうございます。開学80周年を迎える今年度も新たに策定されたスクールプランのもと、さらなる教育事業の拡充・募集活動の強化に取り組んでいます。

### 多様化そして原点回帰

開学以来全国各地から農と食の実践的な学びの場を求める若者たちを迎え入れ教育に取り組んできた本校ですが、社会の多様化が進む中で入学者の資質も少しずつ変化・多様化してきました。小職が勤務し丁度30年になりますが、多様な個性の切磋琢磨は農と食に関わる多様な分野で貢献できる人材を輩出することに少なからず貢献してきたと考えています。しかしながら、毎年入学する多様な学生の中には様々な理由から学園を後にする者もわずかながら存在します。本校としても農と食の学びに求められる多様化に対応するべく取り組んでいます。

が、その一方で「他では学べない」教育のオリジナリティ化も重要と考えます。そこでは特色ある知識・技術を獲得できるだけでなく、鯉淵学園卒業生ならではの人的な魅力を持った人材が育つ総合的な環境―同窓会諸氏が切磋琢磨した環境―であることが強く求められると考え、建学の理念への原点回帰を掲げるスクールプランのもと職員一同意識を一つにして邁進していきます。

### 学生募集協力へのお願い

学生募集は厳しい状況が続いていますが、鯉淵学園ならではの教育展開をすすめるべく、入試選抜段階でも意欲・適性の比重を重視してまいります。具体的には総合型選抜では新たにグループワークを取り入れるなど入試手法を工夫いたします。厳しい募集状況下で志願者の資質を厳しく選考することは矛盾する部分もありますが、真の学園再興を目指す志をもって選考する所存です。同窓会諸氏におかれましても、可能な範囲で本校を周知いただくなどとして、意欲ある入学生の獲得へのご協力を戴きましたら幸いです。





アグリビジネス科  
畜産コース

1年 及川紀子

私の家は北海道で酪農業をしています。小さいころから家の手伝いをしており農業に関わることが多くありました。また、高校では農業高校に通い、家の酪農だけではなく幅広い農業の在り方を学んできました。高校で農業について学んでいく中で、北海道だけではなく、本州の農業も実際に体験したいと考え、

鯉淵学園への入学を決めました。

鯉淵学園の授業は農業の基本から専門的な分野まで幅広く知ることができてとても面白いです。また、実習だけではなく朝夕の管理当番も行っており、一人一人が責任をもって管理することができるという魅力があります。

研究活動もできるので、いろんなことに目を向けて農業の理解を深めていきたいと思います。そして、しっかり経験を積んで家業を継ぎたいと思います。

私は、食がもたらす栄養と健康について学び、将来的には食物アレルギーに精通した栄養士になる事を目指し、鯉淵学園農業栄養専門学校に入学しました。その目標を達成するため、以下の抱負を立てました。

まずは、栄養士実力認定試験でA判定を取る事です。学ぶ事に対して受動的にならぬように、疑問点や分からないことをそのままにせず、積極的に質問するなどして、しっかりと知識を吸収していきたいと思います。

次に、献立作成と調理技術の実践力を身につける事です。健康をサポートするべく、季節ごとの旬を意識した食事を安全に美味しく食べてもらえるように、講義・実習にしっかり臨み技術の向上に努めていきたいと思います。

また、課題解決力を会得することを目指し、積極的にコミュニケーションを図り、行動力や責任感など社会で働くためのスキルを磨きながら、目標達成に向け勇往邁進していきたいと思います。



食品栄養科

1年 中村 遥

## 新入学生の抱負

私は農業関係の職に就きたいと思い種まきから販売まで学べる鯉淵学園の入学を決めました。

入学してからの日々は1日過ぎるのがあっという間に感じるほどに毎日が充実していてとても楽しく過ごしています。それはわからないことがあっても丁寧に優しく教えて下さる先輩方や先生方のおかげでもあります。この学園に入学してただ仕事に就くことだけを目指すのではなく、人に教えて説明できるほどの知識や技術も少しでも多く身につけたいと考えています。

そのために日々の講義や農場での実習を大切に、たくさんのことを吸収していきたいです。また、勉強



アグリビジネス科  
アグリビジネスコース

1年 露久保誉志哉

面では定期テストの最高評価や資格取得を目標として頑張ります。2年間しかない学生生活を有意義なものとするために授業だけでなく放課後も大事にしていきたいです。卒業する頃には悔いのないように何事も全力で取り組んでいきます。

私は、スポーツ関連の職に就きたいという目標をもち、鯉淵学園農業栄養専門学校の食品栄養科に入学しました。その目標を達成するために、以下の抱負を立てました。

まずは、定期テストでA判定以上を取ることです。1回1回の講義を大切にだけでなく、普段から予習復習を行い、知識を自分のものにしていきます。

次に、調理技術の向上です。調理実習に加えて自宅でも料理に取り組み、習ったことの復習と自分で興味を持った料理を作っていきたいです。

これらの目標を達成するために、普段の講義・実習を大切に、わからない点は先生方への質問や自分で調べ学習を行い、知識や技術を身につけたいと思います。また、卒業後は実務経験を積み、管理栄養士の取得を目指しています。仕事と勉強の両立は大変だと思いますが、目標に向けて努力していきたいと思います。



食品栄養科

1年 堀 来愛

# 第31期生会を「城崎温泉」で開催

コロナウィルス感染症の影響で延期になっていた第31期生同期会を、令和5年11月22日、兵庫県豊岡市「城崎温泉」で開催しました。

「城崎温泉」は京都・大阪から電車で約3時間と、遠隔地での開催でありながら27名（男性16名・女性11名）の参加がありました。感謝いたします。次回の同期会は、長野県内で開催することに決まりました。



# 兵庫県支部だより（第18号）が発刊されました

平成24年1月より支部だよりを発行されている兵庫県支部より、第18号発刊のご連絡を頂きました。同窓会HPに掲載しておりますので詳しくはそちらをご覧ください。  
<http://koibuchi.main.jp/>

らをご覧ください。  
<http://koibuchi.main.jp/>



# 「農研友の会」の皆さんが学園を訪問されました

令和6年8月25日、「農村社会研究会友の会」の皆さんが、学園にお出でになりました。研究会の仲間が学園卒業後に「友の会」を結成され、各地で同窓会を開催されたり記念誌を発刊されたりと、継続的に活動を行ってこ



れたそうです。今回久しぶりに14期生3名の皆さん（新潟県、茨城県、徳島県）が笠間市鯉淵に集まられて、本日学園を訪問されたとの事でした。写真撮影後に、園芸農場・畜産農場そして女子寮・男子寮を散策されてお帰りになりました。これからもお体に気を付けながら活動が続けて下さい。

# 第34期生会を「あわら温泉」で開催

第34期生同期会が10月23日に、福井県あわら市あわら温泉「まつや千千」で開催されました。5年ぶりの開催



で、34名（同伴家族も含め39名）が参加し、賑やかに執り行われました。開催2日目は希望者が自家用車に分乗し、東尋坊や恐竜博物館を回るツアーも楽しみました。次回の同期会は3年後（2027年）に島根県で開催予定です。

# 25期生大会が開催されました

令和6年11月4日～5日にかけて、和歌山県和歌山市のマリーナシティホテルを会場に、全国から39名が参加された「25期会 in 和歌山大会」が開催されました。





## 同窓会県支部・卒期別の活動紹介

### 20期生の皆さんが 学園を訪問されました

令和6年11月9日、20期生の皆さんが学園にお出でになりました。北は北海道、南は福岡県から16名の参加でした。

当日は学園祭「いちよう祭り」が開催されており、とても賑やかな中での訪問となりました。



### 33期生同窓会 を茨城で開催

令和6年11月24日(日)から25日(月)にかけ、茨城県大洗町の大洗シーサイドホテルを会場に、2年ぶりに33期生同窓会が開催されました。

次回開催は同期生の多くが古希を迎える3年後に新潟県で、その2年後には栃木県での提案が大筋で決定され、元気に再会する事を誓って帰路に

着きました。  
総会終了後は懇親会が行われ、賑やかに情報交換が行われました。



### 岩手県支部総会が 開催されました

11月26日(土)27日、花巻市金谷温泉にて岩手県支部総会が開催されました。

参加予定者2名が諸事情により急遽欠席となり、総会9名、宿泊8名の参加となり、懇親会終了後全員集合し、24時を回るまで鯉淵学園魂を発揮し議論を重ねました。

### 写真集「心の里 鯉淵学園」の発行

同窓会副会長の若林英一氏(25期卒)が昨年和歌山県で開催された同期会の参加者へ写真集を作成して配布されました。

同窓会HPに掲載しておりますので詳しくはこちらをご覧ください。  
<http://koibuchi-main.jp/>



### 「第36回同窓会大会」 が書面決議で 実施されました

令和7年1月27日(月)「第36回同窓会大会」は、同窓会役員4名、常任委員10名、監事2名の計16名へ総会議案書が郵送され、締切に設定した2月14日(金)までに14名から返信を頂き、賛成多数(全員賛成)で以下の議案が可決されました。

- ① 令和5～6年度事業報告並びに収支決算概要
  - ② 特別会計…能登半島地震への対応報告
  - ③ 令和7～8年度事業計画並びに収支予算(案)
  - ④ 同窓会会則の一部改定
  - ⑤ 令和7～8年度の役員選任
- その後、2月18日(火)に全国の都道府県支部長38名へ総会資料を送付し、結果を報告致しました。



過去1年間、同窓会ホームページ  
(<http://koibuchi-main.jp>)に掲載された学  
園の主なニュースをご紹介します。

## 藤井教授がニュース番組に 出演されました

令和6年5月24日夕方のANNニュー  
スに学園の藤井義晴教授が出演され、外  
来植物「ナガミヒナゲシ」の危険性につ  
いて解説されました。「ナガミヒナゲシ」  
は現在日本全国に生息し、オレンジ色の  
綺麗な花でその見た目のかわいらしさか  
ら、小さな子供でも思わず触ってしま  
いそうですが、危険な毒を含む植物だそ  
うです。皆さんも十分にご注意下さい。



## 入江三弥子教授が 茨城県表彰を受けられました

各分野におい  
て県勢の発展に著  
しい功績があった  
方などをたたえる  
「茨城県表彰」に  
おいて、入江三弥  
子客員教授（29期  
卒、元副学園長）  
が、「保健衛生の  
向上」部門におい  
て令和6年度功績  
者表彰を受けられ  
ました。

## 食品栄養科の 学生と卒業生が表彰されました

令和6年度卒  
業生の新堀さんと  
令和5年度卒業生  
の海野さんが、茨  
城県庁で行われた  
令和6年度県民  
健康づくり表彰  
式で、「ヘルシー  
メニューコンク  
ール」と「季節の  
食材たっぷり！I  
BARAKIヘル  
シーランチ」の部  
門でそれぞれ表彰  
されました。



**令和6年度茨城県表彰**

茨城県は、各分野において県勢の発展に著しい功績があった方などをたたえる茨城県表彰を、毎年11月に実施しています。

今年度は、11月13日に県庁にて表彰式を行い、計63名12団体（特別功績者表彰1名、県民実業功績表彰3名、特別功労者表彰11名、新しいいばらきづくり表彰6名・3団体、知事奨励賞表彰10名、功績者表彰32名・9団体）の方々に表彰しました。

**令和6年度茨城県表彰受賞者について**

氏名、年齢、現住所、主な職歴、功績概要は次のとおりです。（敬称略、年齢・現住所は令和6年11月13日現在のものです。）

※受賞者のうち、年齢・現住所・写真等を非公表としている方については、掲載しておりません。

**保健衛生の向上**

入江三弥子（70歳）  
笠間市／元公益社団法人茨城県栄養士会会長  
多年にわたり、栄養士の資質向上と栄養改善を中心とした健康づくり事業に尽力するとともに、会の役員として積極的な実務推進と保健衛生の向上に貢献した。

## 「おきなわの料理本」発刊に寄せて



島やさい工房  
「かめさんといっしょ」  
山内 都子  
(旧姓 島袋)  
(51期卒)

2010年8月、沖縄県読谷村にて2坪ほどの小さな場所、島やさい工房「かめさんといっしょ」を開業しました。琉球料理や沖縄の家庭料理、島野菜と野草を使った料理の宅配販売と料理講習などを行ってま  
す。店名の「かめさんといっしょ」は開業するきっかけとなった祖母の名前「かめ」で、一緒に料理をする大切さと初心を忘れない想いから名付けました。

沖縄の料理は、料理の基本と全く違った方法で料理をする事もありますが、食材一つ一つの特徴を大切に、旨みを引き出し、医食同源の考えに基づいた先人の知恵が詰まった料理です。

これまで関わった多くの方々から、たくさんのお話を教わり、経験をさせて頂き、沖縄の食文化の素晴らしさを学ばせて頂きました。開業当時から影で一番に支えてくれた父の勧めもあり、10周年という節目に、これまでの活動から「残していきたい味」と「島野菜を使ったレシピ」を本にまとめました。

学生時代は遊ぶことに夢中な時期もありましたが、「食」を伝える立場になり、鯉淵学園で学んだ実習や農業体験が、他の専門学校にはない凄く貴重な学びだったと感じています。

先生方や先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。今後ともご指導宜しくお願い致します。





## 同窓会永年会費

60 38 37 37 33 33 28  
小林 伊藤 吉田 伍井 今井  
浩雄 優子 滿希子 悦雄 國雄  
（埼）（茨）（埼）（埼）（埼）（埼）（石）  
（玉）（城）（玉）（玉）（玉）（玉）（川）

同窓会年会費

研  
46 45 45 43 43 42 33 33 31 29 28 27 27 25 25 25 24 24 23 23 22 22 22 21 19 16 14 14 11 10 10 7  
植下若那近北鈴木石清水奥尾武渡安高近堂松田段横角佐升吉島高村岡唐立  
田新宮須本垣木藤澤澤原崎田瀬藤橋池阪中田田尾山藤田田坂上田田見  
尚貞昌裕古俊辰原猛松く政憲清義信恭保優文喜清明利和勇健  
亨盛人良博之寛修雄隆男喜見雄み勝太郎治子範幸子功夫幸重夫夫夫吉祐祐  
(和(鹿(北(熊(兵(兵(茨(岩(東(長(長(長(岩(石(新(岩(鳥(奈(兵(福(山(東(新(岩(北(熊(岐(茨(福(兵(福(茨  
歌)兒)海)道)本)庫)庫)城)手)京)野)野)崎)手)川)渴)手)取)庫)井)口)京)渴)手)道)本)阜)城)井)庫)島)城)

同窓会寄付金

特選																																				
24	24	24	23	23	23	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22	22	21	20	20	19	19	18	17	17	17	16	16	15	15	15	13	5	2			
田部井	飯澤	竹原	中村	坂口	新関	松田	九石	山中	江幡	小野寺	段田	湯口	広木	錦藤	中山	齋藤	高橋	西野	池間	中鉢	石田	平木	石川	小林	久保田	宮城	佐々木	湯嶋	梅崎	砂田	佐藤					
敏明	なを子	純悦	修一	ミヨ子	八千代	信子	裕	宗治	ゆき子	良明	恭範	康章	文子	正人	洋子	和子	忠彦	昭子	礼子	佐登美	郁夫	信子	弘	義正	勝繁	絃一	宏	紀久子	孝臣	義雄	和一郎					
群	山	岩	茨	佐	静	福	栃	茨	茨	山	山	長	茨	岩	青	岩	埼	茨	東	宮	千	鳥	群	群	山	沖	秋	秋	宮	茨	茨	新				
馬形	手	城	賀	岡	井	木	城	城	形	口	野	城	手	森	玉	城	京	城	葉	取	馬	馬	口	縄	田	田	崎	城	城	城	瀧					

通  
4 70 67 65 63 60 49 47  
田佐福上木小渡山下  
村藤濱野村林部  
幸真由圭好浩佐弘  
三緒美介介作己絵蔵  
子子子子子子子子  
(北(茨(長(茨(茨(埼(福(石  
海城野城城玉島川  
道城野城城玉島川)

54	49	47	46	46	39	37	37	37	34	31	30	29	29	28	28	28	27	27	27	27	27	26	26	26	26	25	25	25	25	25	25	25	25	25	24	24	24	24	24		
伊藤	結城	山下	宮城	植田	刀禰	丸瀬	朝倉	石塚	利根川	青木	竹前	坪野	今井	加藤	鈴木	鈴塚	手塚	鈴木	佐藤	小沼	松本	植松	戸塚	谷澤	平沼	後藤	森本	渡瀬	山本	安藤	齋田	塚田	宮崎	岡野	堂阪	吉川	田代	河西			
真紀子	律子	弘蔵	明生	尚亨	久美	久美	安則	富成	一久	晃	和之	久子	正司	國雄	鉦一	一成	貞男	利通	俊之	一弘	香	延行	博昭	治	常雄	秀一	俊秋	照美	松雄	敬宜、英子	くみ子	マサ江	洋子	一枝	良春	昭一	幹男	清文	千鶴子	みよ子	留美子
茨城	北海道	石川	沖繩	和歌山	茨城	山口	長野	福岡	新潟	神奈川	茨城	長野	新潟	石川	山形	長野	栃野	茨城	茨城	福島	岩手	山梨	群馬	茨城	茨城	大分	愛媛	福岡	石川	富山	新潟	千葉	群馬	栃木	山形	山形	愛媛	奈良	兵庫	静岡	長野

## 80周年記念寄付金

選																						80周年記念寄付金																		通	通	通			
22	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	20	20	19	19	19	19	19	19	18	17	17	17	17	16	16	15	15	14	14	13	13	13	13	11	10	7	7	5	2	4	2	1	68	60	55
段田	高木	湯口	高山	広木	館藤	佐藤	佐藤	植木	西野	井上	出店	池間	齋藤	中鉢	升田	石田	大城	平木	石川	小林	久保田	宮城	堀田	小嶋	原崎	島田	白石	梅崎	道下	柴	唐橋	寺尾	立見	砂田	佐藤	江本	和田	本間	菅野	小林	佐藤				
恭範	経吉	康章	忠夫	文子	正人	雅子	政隆	幸輔	昭子	嘉保留	利彦	茂雄	信子	礼子	文夫	佐登美	昇	郁夫	信子	弘	義正	勝繁	弘	宏	充弘	清重	一秀	壽一	孝臣	喜美男	重男	政勝	健祐	義雄	和一郎	透	幸雄	省吾	絵莉子	浩己	大介				
山	兵	長	長	茨	岩	岩	北海道	岩	新	茨	島	兵	東	栃	宮	北	千	沖	鳥	群	群	山	沖	茨	秋	静	島	福	茨	岩	茨	福	新	茨	茨	新	山	高	宮	福	琦	北海道			
口	庫	野	野	城	手	手	手	手	渇	城	根	庫	京	木	城	道	縄	縄	取	馬	馬	口	縄	城	田	岡	根	井	城	手	城	島	渇	城	城	渇	口	知	城	島	玉	道			

27	27	27	27	26	26	26	26	26	25	25	25	25	25	25		25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	特
佐藤	松本	千葉	武田	同期会参加者	植松	戸塚	谷澤	平沼	松本	後藤	加藤	大塚	森本	土谷		山本	安藤	齋田	保坂	塚田	武藤	澤内	児玉	高橋	厚海	陣内	近池	吉川	岡野	田代	由井	河西	田部井	兼村	飯澤	竹原	中村	池口	坂間	佐藤	新関	田中	山中	江幡	小野寺	久慈	
俊之	照雄	猛見	延行		博昭	治昭	常雄	カズ子	秀一	尚秋	俊秋	照美	順子			敬宜、英子	くみ子	マサ江	洋子	一枝	一敏	正裕	昭一	政勝	多美子	栄子	憲太郎	干鶴子	みよ子	里江	留美子	佳津江	なを子	純悦	修一	景清	貞之	八千代	寿男	宗治	ゆき子	宗悦					
茨城	岩手	岩手	岩手	( )	山梨	群馬	茨城	茨城	宮崎	大分	愛媛	愛媛	福井	福井	(富山)	新潟	千葉	群馬	栃木	福島	福島	(山形)	岩手	(北海道)	福岡	(鳥取)	兵庫	(愛媛)	静岡	長野	長野	(群馬)	茨城	(山形)	岩手	茨城	沖賀	(佐賀)	(島根)	静岡	埼玉	茨城	(山形)	(岩手)			

[illegible]

## 鯉淵学園同窓会 都道府県支部長名簿（令和7～8年度）

支部	支部長名	卒期	支部	支部長名	卒期	支部	支部長名	卒期
北海道	中井 弘	23期卒	石川県	宮崎 章	25期卒	岡山県	平田 精一	24期卒
青森県	藤村 義美	28期卒	福井県	安実 正嗣	24期卒	広島県	桑原 謹二	12期卒
岩手県	千葉 照雄	27期卒	山梨県			山口県	田中 耕二	25期卒
宮城県	山家 賢藏	24期卒	長野県	青木 敏	20期卒	徳島県	逢坂 新治	23期卒
秋田県	山本 平男	24期卒	岐阜県	梅本 広市	32期卒	香川県	川崎 武司	19期卒
山形県	長橋 雅司	28期卒	静岡県	神尾 尚宏	51期卒	愛媛県	大塚 俊秋	25期卒
福島県	五十嵐竹男	23期卒	愛知県	久胡 信隆	21期卒	高知県	山下 秀雄	23期卒
茨城県	大橋 晃市	32期卒	三重県	北川 勝己	23期卒	福岡県	三島 守人	26期卒
栃木県	池崎 誠二	34期卒	滋賀県			佐賀県	近藤 弘道	23期卒
群馬県	久保 好唯	34期卒	京都府	奈良井 真	23期卒	長崎県	尾崎 原喜	27期卒
埼玉県	清川 完司	24期卒	大阪府	成田 正幸	17期卒	熊本県	井 晴生	26期卒
千葉県	卜部 泰郎	19期卒	兵庫県	福井 寛行	26期卒	大分県	甲斐 文義	26期卒
東京都	野澤 ゆう	56期卒	奈良県	堂阪 清文	24期卒	宮崎県	長友 文彦	29期卒
神奈川県	志村 隆	23期卒	和歌山県	松浦 義人	23期卒	鹿児島県	川元 昭司	24期卒
新潟県	重野 徳夫	23期卒	鳥取県	佐藤徳太郎	23期卒	沖縄県	前田 実	30期卒
富山県	石倉 彰	31期卒	島根県	飯塚 伸広	55期卒	学園内支部	秋葉 勝矢	46期卒

## 鯉淵学園同窓会新役員名簿（任期 令和7～8年度）

会 長	黒澤 賢治	25期卒	群馬県支部	常任委員	富岡 忠明	44期卒	東京都支部
副会長兼常任委員長	若林 英一	25期卒	栃木県支部	//	秋葉 勝矢	46期卒	学園支部長
副会長	大橋 晃市	32期卒	茨城県支部長	//	神尾 尚宏	51期卒	静岡県支部長
副会長兼事務局長	石塚 仁	33期卒	茨城県支部	//	熊谷 隆	54期卒	埼玉県支部
常任委員	卜部 泰郎	19期卒	千葉県支部長	//	野沢 ゆう	56期卒	東京都支部長
//	五十嵐竹男	23期卒	福島県支部長	監 事	平沼 常雄	26期卒	茨城県支部
//	江幡ゆき子	23期卒	茨城県支部	//	浅津 竜子	47期卒	学園支部
//	青木 敏	20期卒	長野県支部長	顧 問	倉辻 芳次	19期卒	茨城県支部
//	久保 好唯	34期卒	群馬県支部長	//	長谷川量平	—	鯉淵学園 学園長
	小林 梅代	35期卒	茨城県支部				

### 編集後記

学園創立80年の節目を迎えるにあたり、本号では関係の皆様には色々なお立場で原稿を執筆頂きました。ありがとうございました。

この間の卒業生数は今年3月に卒業した78期生で「8,000名」を超えました。卒業生の皆さんが全国各地で多方面に活躍されている情報が同窓会事務局に多数届いております。

新体制となった学園は「真生鯉淵」のスローガンの下、新しい歩みを始めています。少子高齢化が進む中、「農業と食料」の大切さを引き続き訴え続け、学園存続のためにも同窓生の皆様のご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今年11月21日に「80周年記念式典」も計画されておりますので、同窓生の皆様の多数ご参加をお待ちしております。

同窓会事務局長 石塚 仁（33期卒）

### 記載漏れと訂正について

昨年9月末に発行した同窓会報97号の中で、以下の記載漏れと誤記載がありました。

①10ページ「令和6年能登半島地震…」欄に記載漏れがありました。以下の内容が追加になります。

19 井上 嘉保留（島根）

②11ページ「追悼」欄の下段に掲載したお名前の中に、「23 雨宮 勇（長野）」とありますが、こちらは間違った情報でした。雨宮 勇様 他ご関係の皆様、大変申し訳ございませんでした。謹んでお詫び申し上げます。